

特別講演抄録（2013.3.7）

## 医療者教育への ISD 活用の可能性

熊本大学 鈴木克明

教授システム設計学（Instructional Systems Design：以下 ISD）とは、教育・研修の効果・効率・魅力を高めるための方法論として半世紀にわたって欧米を中心に発展してきた学問領域であり、たとえば AHA のインストラクタ研修パッケージなどの基盤として用いられてきた。医療者教育は、卒前・卒後の2段階に大別できるが、その間に存在する国家試験が卒前教育に大きな影響を与えている。基礎知識の定着が卒前教育の課題となる一方で、研究者養成という大学教育の目的を重視する伝統もある。その結果として、医療者としての実践的な応用力や実行力が思うように育てられず、実践現場の厳しい現実直面して離職する者も少なくないという問題を抱えている。一方の卒後教育では、ルーチン化した研修を対象者や実施時期を考慮せずに漫然と行う例も散見され、多忙な勤務時間の中でいかに計画的に人材を育成し、医療者としての実践力を保持・向上させていくかが課題となっている（ここまでは伝聞です）。

ISD は、教育・研修をシステムとしてみならず問題解決手法である。限られた時間や予算の中でどのように実施すれば求められる人材が育成できるのかを分析・設計し、必要な教材や学習環境を整備し、評価しながら改善する手段として様々な分野で活用され、成果を上げてきた。人材育成が喫緊の課題であり、他職種と連携できる高度な専門職業人が求められている医療者教育においても、この科学的な知見を活用することは意義深い。本学会が医療分野における「教授システム学」を標榜し、人材育成に科学的・実践的に取り組んでいるのも、ISD が医療者教育において大いなる進歩をもたらすという期待に支えられてのことであろう。

卒前教育においては、講義形式による受動的な基礎学習を極力排し、常に「実践現場でこの知識がどう活用されるのか」を意識して、初年次から難易度を徐々に高めていくように配列された応用課題に取り組ませる時間をできるだけ多く確保するための工夫が求められる。応用課題を繰り返し解くことによって、必要な情報はどう調べたらよいのかを身につけさせ、問題解決の手順は課題の内容が異なっても同じであることを体験的に学ばせることが肝要である。応用課題を解く中で自然と基礎知識が体得でき、単に丸暗記して国家試験に合格するのではなく、実践力を支える知識が応用課題を繰り返し解く過程で自然と「身につけてしまう」ように仕組むのである。応用課題に示されている実践現場で役立つ知識やスキルを卒前教育で身につけた学生諸氏は、国家試験に通るだけでなく、やがて実践現場の試練に直面した時にも、「これまでずっと学んできたことと同じだ」という感覚を持ち、それが実践力の現場での「垂直立ち上がり（短期間で使いモノになる）」と離職率の低下にもつながるだろう。

卒後教育においては、研修内容を職務遂行力との関連を常に意識して再点検し、「例年通り」の無駄・無意味な研修を排除することから始めるのが良い。手ぶらで集まって講義を聞くスタイルの一斉研修は、その内容を事前に資料として配布し、予習してくることを前提に組み換える。集まった時には集まってしかできないこと（例えば、問題点や経験の共有、解決策の洗い出し、行動計画の立案など）に貴重な研修時間をできるだけ多く割り当てる。その一方で、集まらずにシフトの合間で各自が学べる手段（パンフレットやeラーニングなど）をたくさん用意すると良い。診断もせずにいきなり治療から始める愚を避けるべきなのは教育・研修も同じであると考え、まず知っているか・できるかをテスト（診断）して、知らない・できないことは何かを明らかにしてから必要な者だけが必要な部分だけの研修を受ける（治療）という方式を徹底させる。診断して治療が必要なことがわかったとしても、自然治癒（自学自習）の道を選んで病状が回復したかどうかを一定期間をおいて再診断（再テスト）するだけでも良いかもしれない。一方で、研修が本当に必要である事項については、徹底的に鍛え上げる。応用レベルの実践力を習得させるためには、同じことをただ何度も繰り返すだけでなく、異なる事例・異なる場面を設定して「違ってでもできる」ようになるまで学びの機会を与える必要がある。

いずれの場合にも、学ぶ者が自らの成長を実感でき、自信を持って職務にあたる工夫が求められる。成長した自分を振り返り、それをアピールできる体制を準備し、その努力が報われる環境を用意しよう。そのためにはまず、自分が「何ができて何ができないのか」を明確にするチャンス（診断）が必要である。医療者教育は、診断と自学自習の組み合わせを基調にして、学び続けることが専門職の倫理であることを自覚させ、ともに学び合う仲間づくりを中核にした「成長支援システム」であって欲しい。そんな教育を創造するために、ISDの知見を活用して欲しいと願うものである。

（熊本大学大学院教授・教授システム学専攻長：本学会理事・編集委員）